

北海の
鰺場
古平風土物語
(四二)

高橋源五郎

声が大変に大きいバリバリした
元気のいい先生であった。師範
学校では剣道の選手であったと
いう。

教室では鞭さばきが鋭く、気合いと共に打ち下ろすこととときどきあつて、暫くの間は生徒に長いこぶや、みみずばれができた者も相当にあつたことを思ひ出す。

先生の生家は明治の初年の頃に、おじいさんの時代に郷里の会津地方から歌棄に移住し、暫くは鯁漁をしていたという。その後、松前地方から次第に鯁の回遊が薄くなり不漁続きとなったので、鯁漁を止め、父は役場に勤めるようになった。(當時は歌棄村役場の助役さんであつ

たとか）男のきょうだいがたくさんいたが、みんな小さい時から父に剣道を習い、鍛えられて

×

×

×

当時の運動場に、教壇をはさんで壁に筆太の墨書の大きな額が二枚掲げられていた。これは、日本で有名なある立派な人が書いたものだという。

先生はこの文字を読み、言葉の意味や、その精神を好んで語っては教えてくれた。不断の努力と実行を尊び、日常の生活の指導にはなかなか厳しいものがあつたことを想起する。

これを見て「お前たちの先生は、スパルタ教育」をしてるん

陸地は難所

ばかり

(5)

波をくぐり、ひとりのアイヌが投げてくれた縄をつかみ、舟の中の水を汲みながらようやくにして岸に舟を着けることができた。

思い出すと、目黒不動尊

へ奉納されていた絵馬に難船しているところへ天から縄が下りてきて、その縄につかまって助かった様子が描かれていたのがあったが、まさにその通りのことがおきたのだ。これは不動

後年になってからのこと、私

にはこの教えは、武士道精神、

：会津魂、教育の精神、につ
ながるものがあつたと、感じさ
せられた。

また、新しい教育、教育方法にも熱心であり感銘するものがあった。

私は受け持たれた二、三か月間は、おっかなびつくりで全くとまどつた。ただ黙々と、コブを貰わぬようにと小さくなつていたのであつた。

暫く経つうちに、ようやく先生の言うこと、やろうとすることが分かつてきた。

尊のご利益（ごりやく）に
ほかならない。

岸に着くと大勢のアイヌ

が出てきていて、舟の中が

ら一人ずつ背負い浜に揚げ

てくれたのである。――同力

西殿裏也の大確所といふ

西郷、其の才、異所といふのはこの才、ワイの奇で、今

までも難沿するものが多か

つた。

これからへロカルイシの

番屋へ入り、火をたき着物

を乾かし、浜伝えにマシケ

へ向かったのである。

■不安と寒さの中で野営

中腹の木の間に少し平らな所が見つかったので、ここが良いだろうと、急いで野営の準備に取りかかった。雪を踏み固め、辺りの木の枝を切り、樺の木の皮をはぎ取って来てまず火をたいた。辺りはすでに真つ暗になつていて、風が吹いてくるとたき火が飛ばされそうになり、寒さが身にしみた。握り飯や餅などを取り出して食べたが、風と寒さで手もこえてきて、冷たい握り飯の味もわからなかった。

火をたいても寒くて眠れないし、ただ夜の明けのを遅し——と待つばかりであつた。

■翌朝晴れ、山風強し
やがて空がうすすらと明るくなり、雪もいつか止んでいた。物音ひとつしない静かな世界であつた。明るくなったので山の峰に向かつて歩き出したが山風が強く、雪煙が顔に吹きつけ、周りもよく見えない。耳が痛いのは雪がずきんの中に入ってくるからで、また着ているものの音がするの

は、衣服が凍って板のようになつてゐるからである。ようやくにして朝九時ごろ頂

明治13年
泊村茅沼炭坑から

古平行の記

上に立つたが、雪がなお降り続け、古平の方向もわからない。磁石で方向を定め、左の方の溪流に沿つて下りることにしたが雪は深くて軟らかく、歩くのに悩むのは前日と同じであつた。

■雪の山中に迷う

下つてはみたがますます雪が深くなり、また山に向かつて登ることになった。

途中に炭焼き小屋でもないかと思ひながら登つたが、その先は絶壁であつた。進むこともできず、仕方なく右の山によじ登つた。雪はそれほどでもないが、顔に吹きつける風が強く疲労の色が濃くなつてきた。

■遭難か？

雲の切れめに太陽！
今となつてはもう戻ることでもできず、進む道もわからなくなつてしまつた。食糧も無くなつたが、二、三日なら何とかなるだろう、そのうち山子か炭焼きの小屋でも見つけられるかも知れないと、いろいろと議論も出たがこのまま進むことになった。もう誰も口をきく者もない。

そのうち、幸いなことに雲が切れ始め、そこから青空が見え太陽がおおのぞかせた。

昔の「すけそ延縄漁」
のことを思い出して

渡辺 ハツエ

過日、岩内湾の冬の風物詩といわれる助宗の延縄漁が始まつた——という記事を見ました。

古平でも、昭和の初期から長引く鱈の不漁の打開策として、助宗漁に進出するようになった。そうですが、私の亡父もその一人でした。子どもなりに、いろいろと両親の苦労する姿を見て育ちました。

小学生の頃です。夜中に騒々しい話声で目を覚ました。父と三、四人の若者がいて何か話し合つてゐるのですが、若者たちは火の気の無いストーブに足をつけていました。父は急いでストーブを焚いて暖めてやると、若者たちを番屋へ送つて行きました。

その若者たちというのは、当時、道南の乙部方面から数隻の船団を組んで、古平に助宗漁に来ていた若い衆だったので、乗組員七、八人で番屋を構え、十一月初旬に来て二か月あまり操業をして、二月までには乙部へ帰つて行くのです。この、回

り番屋、といわれるのが数軒ありましたが、家へ来たこの若い衆は、町で活動写真を見ての帰

り大吹雪にあつて道に迷つてしまったのでした。今のような街灯の設備も無く、雪も多かったもので、夜道で吹雪にでもなると大変だつたらうと思います。

その後、戦時下になると物資の不足で漁の方も大変でした。特に発動機船の燃料不足には苦労をし、悩まされました。重油は配給制でしたが、必要量にはとても足りませんから、どう

しても横流しの重油を闇値で買わなければなりませんでした。米ももちろん配給制で、船一隻の乗組員が七、八人、ほかに陸まわりと家族を合わせると十数人の大所帯となるので、闇米も当然のように買つていました。一家の台所をあずかる母の苦労は私には痛い程分かつていました。

チヨペタン川の側に肝油製造工場がありましたが、母は私が学校から帰るのを待つていて、二人でそりを引いてドラム缶一本の肝油を買つて来るのです。馬ふんだらけの雪道は苦労しましたが、この肝油を重油に混ぜて燃料にしていたのです。

←(次ページ下段へ続く)※

福井幸平

私の寝ているベットでも数知れぬ患者が死んで行ったと思うと薄気味悪く、眠られぬ夜もある。同室の患者は死人が出ても他へは漏らさず、そつと手を合わせて語らぬものです。明日はわが身かと、同郷の元教育長の佐々木さんが同じ病院の内科で亡くなられたことも知らなかった。退院してから知らされて、お悔やみに上がったような次第です。

お願いですが、みなさんのお家にある古い写真、珍しい写真など、これらと思うものがありましたらぜひお貸し下さい。複写して、その写真はお返しいたします。ご協力のほどをお願いいたします。

古平ホトトギス会

掛けてゆき稲架に蝦夷富士かくれけり 熊谷楠丈

掃き溜めて俄な風に舞う落葉

母偲ぶ話尽きざる夜長かな 越野清治

重陽の還暦の酒酌み交わす

立ち話目線よぎりしからす蝶 越野敏雄

達磨絵の古刹尋ねし秋の旅

釣人に馴れ突堤の冬鷗 斉藤波留

最北の宗谷の岬霧の中

囲木のならびし庭や冬近し 大島喜恵

刈り終えし田畑車窓に秋の旅

おどり手の少なくなりし盆踊り 仲谷比呂子

鯨場の古き写真や文化の日

漬るには程よき皺の干大根 大和田絵伊

只快癒祈る母あり十三夜

月あげていつしか漁灯動きけり 仲谷美砂

ブラジルの好きなコーヒー今朝の雪

アカシヤの花散り敷きて庭白し 山口浪

地苺の初もぎ貰い仏前に

梅漬の上手な婆の出番かな 福井幸平

敬老日祖母は東の横綱に

重機もて陸揚げされし大鰯 水見句丈

激つ瀬を渡る身支度山女釣り

(現在会員数 十六人、 会長 水見句丈)



岬短歌会詠草

昭和四十年九月二十六日、町内の同好の士が集まり北見恂吉先生を迎えて結成され、以後、毎月の例会をもっている。今年は創立三十周年を記念して九月三日、文化会館を会場に『第三十二回全後志短歌大会』が開催された。現在の会員数二十人、初代会長大沢文子、現・二代目会長 山口スエ

春疊る前浜に海猫啼き交へば鯨押し寄せし昔偲ばゆ

池田 テル

虫を喰い葉をむさぼりて還りしとふ父の言葉を一生忘れじ

魚屋 友子

この「童子」叱り言葉も今は死語長く生きしか今日誕生日

工藤 政三

雪つもり心淋しき冬となりぬ家路急がむ我子の待てば

越田 由起子

定年となりて始めしジョギングを妻と急がず土手廻りくる

越野 敏雄

若葉萌ゆる丸山に対ふ鎮守の杜広き境内に桜梅きそひ咲く

榑 佳世

崖に生ひて笹原走る垂水のさやかに聞こゆ初詣でのみち

菅原 節子

絵はがきに見れば美しべんべん草母を想へる詩の添へられて

鈴木 時子

古平の大火のわが家の焼跡より見つけたる焼印は家宝となりぬ

竹内 コト

風と雲「もう秋色」と子に語り「母は吞氣」と逆に笑われぬ

田中 香苗

花見より帰りし夫は楽しげなりみやげは袋のさくらの花びら

丹後 初江

「玉碎」とふ言葉を辞典に調べある高校生ら屈託もなく

轟 富美子

眼 必
やせ太の
遠吠え

図書室を最も利用してくれるのは小学生だが、幼児を連れたお母さん方もよく来られる。

絵本を読んで聞かせ、図書室での子どもの動きにも何かと気を配っている様子が見て取れる。幼稚園に入る前の子どものことなので、起きてから寝るまでがつきである。

小さい子どもというのは活動的でまわっているということはない。静かになつたらそれは寝ているか病気である。本を散らかしたり、机の上のものをいじったりするのは当たり前で、物事に興味や関心を持たないことの方がむしろおかしい。そこに、子どもなりの生活のきまりを教えるお母さんの気苦労がある。ところがなかには、子どもが何かをやらかすと、

アカシヤの葉を口に当てブルースを吹きてし弟の夢をみたりぬ 長崎 フユ

一枚の浅羽鰯焼き夫と食むままごとのやうな赴任地の夕餉 堀 昭子

磯つぶを採らむと孫と子とわれが海辺の岩陰を屈みてのぞく 堀 典子

セタカムイ過ぎし頃より暮れにけりわが住む町の灯の色やさし 山口 スエ

詩と歌に見る

古平

昔から鯨漁で栄えた古平の町には、明治から昭和の始めにかけて多くの有名人が訪れていて、かなりの作品が残されているといわれているが、大正八年の浜町の大火（二百三十戸焼失）や、昭和二十四年の西部方面の大火（約七百三十戸）などで焼失したり、その後散逸したものも多く、所蔵の確認されているものは少ない。

また、古平を題材にしたものを古い記録で見ると、安政三年（一八五六）松浦武四郎の『西蝦夷日誌』の中に次の和歌がある。

えみし住ところなれども古平の

浦めずらしくさく桜かな

これは美国から古平への途中、丸山の山桜が美しく咲いている様子を群来町の辺りから見て詠んだものである。

そして「時しも新樹芽をふき桜、桃、李いとおもしろく咲きたり」とある。

この年、頼山陽の高弟であった石川藤蔭が時の老中の命令を受けて古平に来ていたことは記録にあるが、その時の古平に關した作品らしいものは無い。

（次号で古平を訪れた文人、そのほかの人たちの作品を紹介）

『せたかむい』に寄せられる作品もいろいろとありますので、今回からそれらをまとめ《文芸》ページとして出してみることになりました。これを機会に、みなさんからの自由な作品をお待ちしております。

「そんなことをしたら、そこにいるおじさんにおこられるヨ！」

気になるひとことである。なんでおじさんがそこに出てくるのか――。

そんな時、うっかり調子を合わせて注意でもしようものなら、すかさず

「ソーレみなさい、おじさんに怒られたでしょ。おじさんこわいんだから……」とくる。

自分の子どもをしつけるのに、自分は優しい、いいお母さん？ のふりをしていて、おじさんをダシにするとはなんということ！ こんな時こそ子どもをしつけるいい機会なのに、それを他人に任せようというのだろうか。

何もいちいち叱ることはない。これは根気よくそのつど言ってきかせることしかないと思うのだが。これでは、ふだんから親の言うことをきかないように育てているのでは――と勘ぐりたくもなる。「おじさんの怒ってるのは、お母さんの方なんだゾ！」



遙かなる故郷の思い出

丸山沖の鰯釣り

1

[15]

橘

義

春

昭和二十三年の春だったと記憶している。親戚の笠谷家の男さんが、

「オーイ、鰯釣りに行くベエ、そろそろ釣れてもいい頃だ。トキシラズのおっきた(大きい)ヤツがバグツトくるぞ」

「俺に釣れるべが——。アブラコとハゴトコしか釣ったことがねエもな」

「まアやってみれつてば。道具とエヤ(餌)だら俺にまがせでくれ」

「うんだが……したら頼むでア——」

「あさま(朝)の七時に舟を出すからナ」

と、話はきまった。

早速わが家の釣りの名人・祖父に釣りのノウハウを伝授してもらおうと話をしたら、開口一番、「なにッ、おめエ鰯釣るつてが——鰯の方でビックリして、尻ふつて(おならをして)逃げでいぐベサ、ハッハハハ」ときた。なにしろこっちはわか漁師で、釣りの名人にからかわれても一言もない。

「そつたらごと言わねエで、教えてくつてば、どんだべ」

「教えてくれたつて、特別なもねエ。エエが、あした沖サ出だらナ、勝男の釣り方よりぐ見で、自分でおぼえるより仕方ねエベサ。漁師はナ、みんなほがの人の仕事ぶりば見でおぼえるもんだ」

：ものを：を大事に

便利な町の『修繕屋』さん

竹内コト

と、ピシッとやられた。相手は名人だし、さからつても駄目なのであきらめた。

翌朝、七時に浜に行ったら、もう勝男さんは来ていた。いい天気、海はとろなぎだ。なんだか今日は、にわか漁師のおれにも釣れそうな気がしてきた。

磯舟には權が二組用意してあり、二人で漕ぐと相当スピードが出て、短時間で丸山岬沖合の釣り場に着いた。いかりを入れたこの場所は、昨年、大物がたくさん釣れたという。期待が大きふくらんできた。(続く)

私は結婚した当初、新地町の成田さんの二階にいたことがあります。その頃、成田さんのおばあさんはゴム靴の修繕をしていました。冬は季節になるとおばあさんはそれこそゴム靴に埋まって仕事をしていました。ゴム靴は冬の必需品でしたし、値段も高いので新品はなかなか買えませんでした。

戦前は、下駄(げた)が一般的な履物で「下駄屋さん」も何軒ありました。庭下駄のように

※ また、助宗の延縄にサメがかかるサメの肝臓を鍋で煮て油をとり、それを機関の潤滑油として使いましたが、その時に洗濯石けんも混合するとなお良いということでした。



遠い昔のことを懐かしく思い出す年齢になりました。

古平でもあの大火以前は、ほとんどの家は桎(まさ)屋根でした。何せ木を薄く割ったものだから雨には弱く、また大風が吹くと桎が飛ばされ、あちこちで屋根の修繕をしている光景が見られました。屋根の修繕は何よりも先にしなければならぬことです。大風のあとは「屋根屋」さんの出番です。屋根だけは、いたんだからといって家まで建て替えることは出来ません。桎屋根はいつも手入れをしておかないと雨の日など大変です。漏れてくる場所に桶や洗面器を置いたりします。が、そこに落ちてくる雨だれの音が妙に寂しく響きます。雨はところかまわず漏れてくるので、畳まで上げることがあり、こんな時は本当にわびしい思いをし

と衛兵半田岡別登温泉

—— 古い文書に見る ——
登別温泉の開発と岡田家

■松浦武四郎の日記から
安政五年八月二十三日より先である。

松浦武四郎は蝦夷地について多くのことを調べ、それを本に書いて、当時まだよく知られていない蝦夷地のことを広く日本中に知らせた功勞者である。

〔中〕

安政三年(一八五六)から同五年まで、蝦夷地を調査した中から主として東蝦夷地に関することを書いた本の中にノボリベツのことが出ています。

「弘化二年(一八四五)ここに来た時には人家が無かったが、今は止宿所も出来ていて、湯治をしている人もいます。

以前は、湯の流れてくる川の中にむしろを敷いて湯に入っていたが、今は川の上に屋根を掛けていて、二つの川(西シユンベツ川は冷水、東クスリサンベツ川は熱湯)からの水と湯をまぜて、ほどよい湯にして入っている。硫黄性の湯なので臭いが甚だしい。」

とあるが、いずれにしても滝本金蔵の発見したといわれている

安政五年八月二十三日より先である。

■岡田家の『家事当座帳』
岡田家十一代正庸の『家事当座帳』を見ると、

「一、五月二十六日、小樽運上家を立出、セニハコ泊、

二十七日立出、山道を通行し、千歳泊、

二十八日、ユウフツを出て白老泊、

二十九日九ツ時、ホロベツ着(そして)六月十五日、ノボリベツ湯本見分」

これを見る限りでは、岡田家主人がノボリベツ温泉湯本を調べていて、期日が六月十五日ということになる、滝本金蔵が霊夢によって発見したという、

安政五年八月二十三日より約四十日早いことになる。

■岡田家の『事歴書』から
『別帳』があつて、それにはさらに、当時ホロベツ在住の役人の氏名、扶持(給与)など詳しく書かれているが、ほかに『事歴書』に温泉の記事がある。

「モロラン、ホロベツ

嘉永二年六月、松前侯より請負を命じられたが、無産地、不毛

地で莫大な損をした。

安政五年夏の頃、モロラン・ホロベツ間の道路改修をした。

同年秋より翌年にかけて、モロラン会所を新築したが、費用は二千両。

ホロベツ会所も同年改築した。これは役人の通行に便利のためである。

ホロベツ領ノボリベツの温泉を開き、元の小道を改修した。湯治人が止宿する小屋を建築したが、二か所で七百五十両以上もかかった。この時の支配人は木下磯吉であつたが、功勞があつたということで幕府の役人から褒賞を受けた。」

■『登別の歴史』から
やさしい史話」から

「安政四年(一八五七)から五年にかけて、箱館奉行の入湯という画期的な出来ごとがあり、地元場所請負人岡半兵衛の道路開削、止宿小屋建築があつて、里への開かれた温泉として和人にも広く知られるようになった

折から後世に、湯治の祖と呼ばれる滝本金蔵が入地し、その終生を湯守として捧げ、温泉の発展に献身する。その業績は今日の温泉繁栄の基礎を築いた」とあり、岡田半兵衛が温泉を開いた後に滝本金蔵が来たというように読みとれる。

■岡田家の硫黄採掘
当時、岡田家ではノボリベツ温泉湯元で硫黄を採掘していたが、このことが温泉と深いかわりがあつた。

温泉は採掘現場で働く鉦夫や運搬の工夫の湯治にも利用することができたし、硫黄の運搬にも道路の改修は必要なことであつた。奉行所でも道路をつくるのに金が乏しく、そこで請負人に協力をさせた。

こうして道路の改修がされたことが、その後の温泉の発展につながつたのであつた。

■「当座帳」によると、
「ホロベツ領ノボリベツ湯元での硫黄製造は、一日に約二十貫(七五匁)を釜で煮ている。今年から(安政五年)新道が出来たのでノボリベツまで一日二往復できる」とあるが、先の『事歴書』を見ると、

「以前この辺りは、薪などを取るためにきこりが通るだけの小道であつた。硫黄のほかホロベツ山から木材やブナ板などを時々切り出したが、収支勘定が合わず莫大な損をした」

硫黄生産の燃料として薪を切り出したほか、木材として売ったがそれでも元がとれなかつたようである。

とあるが、先の『事歴書』を見ると、

「以前この辺りは、薪などを取るためにきこりが通るだけの小道であつた。硫黄のほかホロベツ山から木材やブナ板などを時々切り出したが、収支勘定が合わず莫大な損をした」

硫黄生産の燃料として薪を切り出したほか、木材として売ったがそれでも元がとれなかつたようである。

とあるが、先の『事歴書』を見ると、

「以前この辺りは、薪などを取るためにきこりが通るだけの小道であつた。硫黄のほかホロベツ山から木材やブナ板などを時々切り出したが、収支勘定が合わず莫大な損をした」

硫黄生産の燃料として薪を切り出したほか、木材として売ったがそれでも元がとれなかつたようである。

とあるが、先の『事歴書』を見ると、

「以前この辺りは、薪などを取るためにきこりが通るだけの小道であつた。硫黄のほかホロベツ山から木材やブナ板などを時々切り出したが、収支勘定が合わず莫大な損をした」

硫黄生産の燃料として薪を切り出したほか、木材として売ったがそれでも元がとれなかつたようである。